

慢性硬膜下血腫

病気は忘れた頃にやってくる。「ちょっと頭をぶつけただけ」と軽く考えたら、その後で痛い目に遭ったりする。

68歳のTさん。この頃、ふらふらして、すべすべ転びそうになる。「こしもボーとしていて、忘れっぽい。認知症では？」と家族に連れてこられた。

認知症ではない。左の手足に軽い運動まひがある。頭のMRI（磁気共鳴画像装置）の検査では、右側に大きい「慢性硬膜下血腫」が見つかった。血腫は、頭蓋骨の下の硬膜と脳表の間にある。2〜3センチの厚さで、脳全体を強く圧迫している。ここまで大きくなれば、手術するしかない。

慢性硬膜下血腫は、ドアに頭をぶつけるという程度の軽微な頭部打撲でも起きる。1、2ヶ月後の、ぶつけたことをさえ忘れる頃になって症状が出てくる。Tさんも、何度が質問して、やっと思い出した。「そういえば、年が明けて雪がたくさん降った時に、雪道で滑って後ろ頭をぶつけたことがある」と言う。

血腫は、じわじわと時間をかけて大きくなる。脳は、圧迫がギリギリになるまで、シッと我慢の子だ。やがて限界を超えるると、頭痛や手足のまひ、言語障害などが出てくる。高齢者の症状は、しばしば認知症と間違えられている。そんな脳の症状が出てしまえば、Tさんのように手術を受けるしかない。

ならば、血腫ができていても、まだ小さい間。脳の圧迫が軽い頃に。つまり、症状が出る前に血腫を見つければよいのではないか。この段階なら、血腫を散らす薬物療法がある。

ところで、慢性硬膜下血腫は脳萎縮のある高齢者、血液サラサラの薬を飲んでいるひとやお酒飲みに起きやすい。そういう人が運悪く頭をぶつけたら、まずは、カレントナー（その日）に丸印をつけよう。で、2、3週間後、頭の検査を受けるのはどうだろう。

（石黒修三＝いしくろしゅうぞうクリニック・脳神経

外科専門医…2/21北國新聞掲載）